

ボランティア情報

2024

3月号
no.562



～つながる、広がる、福祉教育～

福祉教育 わたしたちの実践

奈良県 香芝市社会福祉協議会 地域支援総合相談係 社会福祉士

香芝市ボランティアセンター ボランティアコーディネーター

あらき かずなり
荒木 一成さん

やまざき としこ
山崎 敏子さん



【授業で知り合った当事者と子どもが声をかけ合える地域へ】

香芝市社会福祉協議会（以下、市社協）が実践する福祉教育で、大変なことやできないことを懸命に話す障害当事者を、「かわいそう」と言う子どもたちを見た荒木さんと山崎さんはハッとしました。「当事者と子どもたちの思いが噛み合っていないと思いました」と口をそろえます。改善の必要性を感じ、できないことよりできることが伝わる福祉教育を実践したいと考えました。

実践に向けて苦労したことは、当事者の話の方向性をネガティブなものからポジティブなものに変換していくことでした。そこで荒木さんたちが当事者と対話を重ねると、当事者ならではの生活の工夫が数多く見えてきました。荒木さんは次のように語ります。「例えば、視覚障害者の方はジャガイモ

の皮をむく時に親指の感覚を頼りにし、むけた部分とむけていない部分を探っていると話されました。当事者には当たり前すぎて、これまで話したり実演したりするという発想が浮かびませんでした。しかし、子どもたちにとっては発見や驚きになると考え、できることと、サポートが必要なことをありのまま話せばよいのだと気づいたので、こうして協働するなかで、何を伝えたいのか皆の視点が定まってくにつれて、授業も変わっていきました。

さらに、教材として「〇〇さんの当たり前」と題した動画を制作しました。障害によって一人ひとり違う暮らしの工夫や特技を紹介する動画です。障害のない人にとっての当たり前が、少しの工夫で障害者にとっても当たり前

なることを子どもたちに伝えることができました。山崎さんは「映像からも情報を得ることで、『障害者の方々はこの町でともに暮らす人だ』と、子どもたちの認識が変わっていくのを実感しました」と語ります。実際、授業後に行った子どもたちへのアンケートで「車いすの人も目の見えない人も自分も、工夫しながら暮らしているのは同じ。身近に感じた」などうれしい変化がみられました。最近では、授業で見知った当事者と子どもの間で「〇〇さん、この前学校に来た時より髪染めた？」「わかるの？ 染めたよ！」という会話が町のなかで生まれています。二人は「今後も当事者と子どもたちが声をかけ合える地域づくりを福祉教育の目標にしていきます」と話してくれました。

Contents

- P.2 ▶ **特集** 受刑者・在院生や刑余者の社会参加につながるボランティア活動
～社協は誰もがボランティアできる社会づくりに向けて何ができるのか？～
- P.6 ▶ わたしにとってのボランティア P.7 ▶ キーパーソンから学ぼう！
- P.8 ▶ 災害ソ・ノ・ト・キ！ | インフォメーション

受刑者・在院生や刑余者の社会参加につながるボランティア活動 ～社協は誰もがボランティアできる社会づくりに向けて何ができるのか？～

本特集では、罪を犯した人々の地域とのつながりづくりに取り組む社協の実践を紹介すると同時に、誰もがボランティアできる地域づくりに向けて、社協だけではなく地域の関係者と連携して取り組むための工夫や仕組みづくりを紹介します。

事例 1

▶ 除雪作業の担い手不足という町の困りごとを通じて、町、刑務所、町社協が連携を深める。理解ある町民に支えられ、全国でも事例が少ない受刑者支援を実現

北海道・月形町社会福祉協議会



後列左から、井口さん、本多さん、尾崎さん
前列左から、磯谷さん、竹田さん

月形町は札幌の北東 50kmに位置し、南東に石狩川が流れる肥沃な地域です。人口は3,000人を切り、高齢化率も 42%と高くなっています。メロン、スイカ、トマトなどの果菜栽培や切り花栽培が盛んな一方、冬場には年間約 9mもの雪が降る豪雪地帯です。

月形町社会福祉協議会（以下、町社協）では、町に所在する月形刑務所と連携し、2023年より受刑者による町内の高齢者宅の除雪ボランティアを行っており、全国でも珍しい取り組みとして注目されています。

月形町社会福祉協議会

会長 竹田 紘一さん／事務局長 尾崎 美世子さん

月形刑務所

磯谷 さん／井口 さん／本多 さん

まちづくりを共通項に始まった 刑務所との交流

月形町には、1881年に誘致した樺戸集治監（現在の刑務所の前身）に収容された囚人によって開拓されることで町が誕生したという、特殊な歴史があ



まちづくりフォーラムのグループワークの様子。
「まちの困りごと」について話している

ります。刑務所とともに発展した町で、町民にとって刑務所は決して特別な存在ではないものの、接点はほとんどありませんでした。

町社協と月形刑務所の交流が生まれたのは、約2年前のことです。本多さんは次のように語ります。「受刑者が出所後、各地の福祉施設や社協にお世話になることがあると知ったのです。それならほかの刑務所の出所者が、月形町の社協や施設に立ち寄ることもあるだろうから、つながりを作っておいたほうがいいと考えました」。本多さんは地域活動への関心が高く、まちづくり団体「つきがたデザイン」の代表という別の顔もっています。

一方、町社協は「地域福祉実践計画」

の一環で、60名ほどの町民が参加する「まちづくりフォーラム」を定期的で開催しており、本多さんは一町民として、その策定委員に加わることになりました。フォーラムに参加した町民の声から本多さんは、除雪作業の担い手不足が深刻であることを知りました。

町のニーズと刑務所のニーズが 合致してプロジェクトが動く

月形刑務所では、地域社会への貢献・地域社会との融和を重点施策のひとつとしており、2023年には「地域連携協働プロジェクトチーム」が立ち上げられました。受刑者に対しては、通常の刑務作業とは異なる、「社会貢献

（公財）ニッセイ財団「地域福祉チャレンジ活動助成」（2024年5月31日締切）

助成金情報

地域福祉にかかわる5つのテーマ（分野を横断した協働による地域づくり等）にチャレンジする意欲がある団体への助成。助成金額・団体数は、1団体最大400万円（1年最大200万円）、3団体程度。（詳細は「ニッセイ財団 高齢社会助成」で検索）

作業」と「外部通働作業」を実施することになりました。いずれも出所時期が近い、あるいは日頃の行状がよい受刑者を対象にしたもので、受刑者を塙の外に出すという、全国の刑務所でも非常に珍しい取り組みです。

外部通働作業としては、地元の福祉施設やトマト工場での受け入れが決まり、受刑者が一人で通い、所定の作業に従事するプログラムが実現しました。社会貢献作業についても実施方法を模索していたところに、除雪の問題が浮上してきました。プロジェクトチームの一員である磯谷さんは、「社会に貢献しているという実感は、受刑者の意欲向上につながります。町の除雪作業は、その趣旨にぴったり合致していました」と振り返ります。

実現に向けた最大の難題は、運営が税金でまかなわれる刑務所では、特定の家の除雪作業は個人の利益にあたり、規則に抵触することでした。しかし町社協との連携における活動という形を取ることで、この問題を回避できました。さらに、活動の具体的な計画を取り決め上申し、法務大臣の認可を得てようやく受刑者による除雪作業を行えることになりました。尾崎さんは、「まさか受刑者が除雪をしてくれるなんて、思ってもみませんでした。全国の刑務所でも初めての取り組みであることや、申請手続きが大変だったのを後で知り、驚きと感謝の気持ちでいっぱいでした」と率直に語ります。

刑務所内にボランティア組織が 立ち上げられる

本多さんはこの取り組みを、単なる



受刑者による除雪ボランティアの様子

社会貢献作業の事案と考えていたわけではありません。地域の人困っていると知った時から、「自分が動こう、一人でもやろう」と思っていたと言えます。受刑者による作業を実施するには、活動の日時や場所をあらかじめ決定し、5～6名の受刑者に対しほぼ同数の職員が同行するなど、準備が必要です。逃走など万が一の事態に備えて警察の協力も必要で、活動エリアも刑務所から近い場所に限定されます。

本多さんが刑務所内に除雪のボランティア組織を立ち上げたところ、賛同する職員が集まり、2022年度は延べ27名が除雪に参加しました。ボランティアを行うためには、職員が休暇を取る必要がありますが、今年度は入職3年未満の職員を対象にした災害赴援訓練として、職務時間内に除雪を行う試みも始まりました。こうした仕組みづくりの理由を本多さんは、「できるだけ柔軟に活動できるよう、チャンネルを増やしておきたいと思いました。受刑者を出すには準備が必要だし、職員も業務上、急に休みを取れないこともあります。訓練であれば、刑務所長の承諾が得られればすぐに動くことができます」と説明します。

社会への貢献が受刑者の 意欲喚起につながる

活動が実現した背景には、町民が刑務所や受刑者の存在を否定せず身近に感じているという、月形町ならではの風土があります。受刑者が町へ出ることに、町民からの反対の声はありませんでした。

受刑者による除雪の実施は2022年度は2件、手作業による除雪でしたが、豪雪地帯の積雪には、機械でなければ追いつきません。今年度は除雪機が導入され、活動できる範囲も町内全域に拡大されたことから、実施件数は10件ほどまで増えました。受刑者は、除雪を行った家の住民からの希望で、「ありがとう」とお礼の言葉を受けることもありました。受刑者にとっては、「除雪作業に参加してよかった」「感謝

の言葉をもらってうれしかった」と、働くことや人の役に立つことの喜びを体験する機会になりました。

受刑者の社会復帰を 受け入れられる世の中に

除雪を通じて、町社協と月形刑務所の交流は深まりました。刑務所内でも、ボランティアが職員のコミュニケーション向上につながったといえます。尾崎さんは、「以前は、ボランティアの顔ぶれがいつも同じだなんて町の人に言われていましたが、刑務所の方がたくさん参加してくれるようになって、私たちも新鮮な気持ちで楽しんでいます」と成果をかみしめています。

磯谷さんは、「受刑者はいずれ社会に出ていきます。私たち職員が社会に働きかけ、貢献することで、受刑者を受け入れてくれる社会になってほしいと願っています」と、職員が地域と関わることの意義を訴えます。

町の特性、刑務所の積極的な地域参画、そして町のニーズをくみ取ることを欠かさない町社協の姿勢が相まって、前例のないチャレンジが成し遂げられています。本多さんは、「一人ひとりが自分の強みを、ほんの少し社会のために使うだけで、大きな力につながります。自らの得意を活かしたプロボノ活動にチャレンジする人が増えるといいなと思います」と、多くの人に関わって社会を醸成していくことの重要性を語ります。町社協と刑務所は今後、除雪以外の社会課題にも取り組んでいく予定です。



刑務所刑務官による除雪の様子

助成金情報

(社福)NHK厚生文化事業団「第36回 NHK厚生文化事業団 地域福祉を支援する『わかば基金』」(2024年4月26日締切)

地域での福祉活動や被災地での福祉活動の展開、または被災地の復旧・復興などに取り組むボランティアグループやNPOへの助成。

(詳細は「NHK厚生文化事業団 助成」で検索)

▶ 女子少年院の在院生と、福祉施設の高齢者、子どもとの「心」をつなぐプロジェクトを実践。さまざまな事情をかかえた人を受け入れる社会をめざして

大阪府・交野市社会福祉協議会



後列左から、
各務さん、天場さん、
渡辺さん、南部さん
前列左から、
藪さん、青山さん

交野市社会福祉協議会

課長 かがみ まさとし
各務 正敏さん

交野女子学院

次長 やぶ たかあき
法務教官 藪 高明さん

交野市は、大阪府と奈良県の県境に位置し、約7万7千人の人が暮らしています(2024年1月現在)。交通の便がよく、多くの住民が大阪市や京都府に通勤・通学するベッドタウンです。市内には天野川が流れていることから、地域では七夕伝説をはじめとする多くの伝説が存在し、行事も数多く催されています。交野市社会福祉協議会(以下、市社協)では、2022年から市内の女子少年院、社会福祉施設などと協働し、七夕やクリスマスにイベントを実施しています。更生支援としてだけでなく、地域共生社会の構築を主眼とする取り組みについて取材しました。

罪を犯した人の社会復帰のため 地域ぐるみで更生支援を行う時代

交野市には、女子少年院である交野女子学院(以下、学院)が所在し、おおむね14歳～20歳未満の在院生が矯正教育を受けています。個々の課題や状況に合わせた生活指導および教科、職業指導などが行われ、約1年間で社会復帰をめざします。もともと、更生支援は国の管轄として少年院や刑務所を含む刑事司法機関で完結してきました。しかし、2016年に施行された「再犯防止等の推進に関する法律」に基づき、罪を犯した人が円滑に社会復帰できる地域づくりを推進するため、地域も更生支援の取り組みを始めています。

こうした社会情勢を追い風に、学院では市や市社協などどのような連携が可能か模索してきました。以前から、在院生による地域の清掃活動などを通して地域貢献に取り組んできましたが、在院生がより地域とのつながりを感じられる事業を実施したいと考えていたのです。そして2019年、市社協や福祉施設と連携し、在院生が学院内で福祉施設の車いすを清掃する事業や、サロン活動への協力などが計画されました。ところ

が、折あしく新型コロナウイルス感染症が拡大し、実施には至らなかったのです。

在院生が地域と心でつながる 「七夕プロジェクト」を実施

その後、市社協と学院との連携が再開したのは2021年のことです。学院側から、在院生が栽培した野菜を、社会福祉施設や子ども食堂に寄付をしたいと申し出たのがきっかけでした。さらに2022年には、市の主導で「交野市更生支援ネットワーク会議(以下、ネットワーク会議)」が設置されました。構成メンバーは、市や市社協、学院をはじめ、地区保護司会や大阪保護観察所、交野市社会福祉施設地域貢献連絡会などです。このネットワーク会議で企画されたのが、デイサービスの高齢

者と保育園・こども園の子ども、ボランティアそして学院の在院生が、世代を越えて心の交流を図る「かたの七夕プロジェクト(以下、七夕プロジェクト)」です。

具体的には、まず高齢者と在院生が短冊を作成し、その短冊に子どもたちが願いごとを書きます。飾りつけは学院や保育園・こども園、保護司会などで行い、笹や短冊は市内の商業施設や公共施設に設置し、イベント終了後は、市内の神社に奉納します。

これは、2021年12月に、デイサービスが「コロナ禍でも非接触でできる交流を」と実施した、高齢者が作成したクリスマスカードを子どもに渡すというイベントをヒントにしたものです。各務さんは次のように語ります。「デイサービスの職員の方が『コロナ禍で



学院の法務教官や保護司、保護女性会、デイサービス職員、市職員とともに準備を行う



短冊を作成する様子。たくさんの人に届くようにと、作業にも熱が入る

人との距離は離れても、心はつながることができるはず』と話していたのが印象的でした。きれいなクリスマスカードはお店に行けば買えますが、高齢者が一生懸命に子どもたちを思って作ったカードだと伝えることで、子どもの心にも響くものがあるはずです。在院生にも、短冊の作成を通して誰かに喜ばれ、心のつながりを感じる体験をしてもらえたらと思いました。」

在院生の意欲を引き出すため 丁寧にフィードバックを行う

ちょうど七タプロジェクトの企画が進行している頃に、他の施設から学院に異動してきた藪さんは、ネットワーク会議に参加し「とても熱量の高い方々ばかりで感動しました」と振り返ります。そして、七タプロジェクトに参加する意義について次のように語ります。「在院生は直接、住民の方と接することはできませんが、短冊の作成を通して間接的にでも交流することで、地域に心地よい居場所や出番をつくるという意識を養ってもらえたらと思います」。また、在院生の多くは自己肯定感が低く、そのため再犯につながるケースがみられる傾向にふれ、「地域とのつながりのなかで人の役に立ったり褒められたりする経験を通して、自己肯定感を高めることができればと考えています」と期待を寄せます。

また、学院では短冊の作成は強制ではなく「余暇時間」のなかで希望者のみが参加します。わずかな自由時間で地域貢献に参加しようとする在院生の気持ちを大切に、他の在院生にも広げるため、事前の動機付け

や活動後のフィードバックは丁寧にを行っています。実は、短冊や笹を神社に奉納することになったのは、在院生から「最後はごみとして捨てるのでは」との声があがったためで、在院生の参加意欲を損なわないために、七タプロジェクトのチームのなかで検討したのです。

そして、高齢者や子どもの様子を直接見ることができない在院生に対するフィードバックについて、藪さんは次のように工夫を語ります。「短冊の作成や記入、飾りつけ、施設で飾られている様子や奉納など、それぞれのタイミングで職員が現場まで足を運び、笑顔の写真を撮影して在院生に見せています。なかにはお礼のお手紙を書いてくださる方もいるので、そちらも学院に掲示しています。これは、野菜を施設に寄付させていただいた際も同様で、皆さんがおいしそうに野菜を召し上がっている様子を撮影し、在院生に報告しています。こうして喜んでもらっている様子を見ることで、在院生も『やってよかった』『またやろう』と思えるのです」。

多くの主体と連携し、 誰もが住みやすい地域をめざす

七タプロジェクトは、参画した関係者のみならず地域からも好評で、その年の冬、学院やデイサービスでクリスマスカードを作成し、保育園・こども園に配布する「クリスマスプロジェクト」につながりました。学院では、参加した在院生たちが自主的に分業体制を敷いて作業に取り組むなど、成長を

感じる様子もみられたといいます。連携する主体も増え、2023年度以降は、ひきこもりなど孤立している人たちの集いの場「かたの×サードプレイス」も短冊の作成に参画しています。

市社協も市と密接に連携し、再犯防止推進計画などを盛り込んだ重層的支援体制整備事業のなかで、両プロジェクトに関わる補助金を用意しました。これを活用し、介護保険制度上、商業施設などに設置された笹を見に行けず、寂しい思いをしていたデイサービスの高齢者のために送迎車を用意し、現場まで連れていくことができました。各務さんは「高齢者の皆さんは、ご自分たちがつくった短冊が飾られているのを見て大変喜んでいましたし、特別な場所に出かけるということでおしゃれもして、とても楽しそうでした。高齢者の皆さんにとっても、誰かの役に立っているという実感が生きがいや活力につながるのだと、改めて感じました」と振り返ります。

また各務さんは、多くの主体を巻き込んで連携するうえで心がけていることについて次のように語ります。「新しく事業を始める時は、ひとつの機関や事務局に負担が集中しがちです。そうではなく、数字で表すとしたら、1.1倍くらいのがんばりをつなげていくことが大切だと思います。2倍も3倍もがんばっては事業を継続できません。皆さんがもつ力を少しずつつなげていくなかで、それぞれが得するポイントが見つければいいと考えています」。

こうした取り組み全体を振り返り、各務さんは連携する関係者が「罪を犯した人」への支援ではなく「地域で生きるすべての人」をどう支援するかという思いを共有していることが大切だと強調します。どのような境遇の人であっても差別や特別扱いをせず、受け入れる社会になることが、住民のための地域づくりにつながります。

少年院などが所在していない地域にとっても、参考になる取り組みといえそうです。



子どもたちから学院にクリスマスカードのお礼。「ありがとう」の言葉が心に染みる



ショッピングセンターに笹を設置。たくさんの方が願いごとを書いてくれた

助成金情報

(財)フランスベッド・ホームケア財団「令和6年度(第35回) 研究助成・事業助成・ボランティア活動助成」(2024年4月15日締切)

在宅ケア等に関する創意工夫を活かした自発的な事業または先駆的、実験的なモデル事業であって、地域の実情に即したきめ細かな研究・事業・ボランティア活動で普及の可能性のあるものに対する助成。(詳細は「フランスベッド・ホームケア財団 助成」で検索)

わたしにとってのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協VCが若者とながら地域づくりを考えるきっかけを提供します。



佐賀県唐津東高等学校2年
江口 紗也さん

第12回

佐賀県

ウェド

NPO法人WeD

団体紹介

高校生が将来の選択肢を自ら広げるための「きっかけ」となる活動を支援。唐津市内6校の生徒が約40名参加し、学校や世代の枠を越えて協力し合いながら、海岸清掃やカフェ運営、被災地支援などの活動を行っている。

商店街で高校生主体の文化祭を企画・運営し、音楽フェスのボランティア運営も支援

どのようにボランティア活動に取り組んでいますか？

私は高校生スタッフとして、WeDの活動のなかの2つのチームに所属しています。ひとつが、波戸岬海浜公園で開催される音楽フェスとキャンプを融合した「Karatsu Seaside Camp FESTIVAL」のボランティアの運営を支援するチームです。初めて参加した2023年は写真撮影を担当しました。2024年も5月に開催されるため、今は当日参加されるボランティアさんを受け入れるためのさまざまな準備を、大人メンバーと一緒にしているところです。もうひとつは、高校生が中心となって唐津市の商店街で「からつまちなか文化祭」を開催するチームです。このチームでは代表を務めており、2024年3月の開催に向けて、さまざまなイベントや模擬店の出店などを行う文化祭全体のまとめ役を務めるとともに、



「Karatsu Seaside Camp FESTIVAL」のボランティアを運営するメンバー

楽天や富士通などの企業や学校法人角川ドワンゴ学園 N高等学校・S高等学校とのコラボ企画も進めています。

江口さんにとってボランティア活動の魅力とは？

校外の人と関わり合いながら活動できることです。他校の生徒だけでなく、地域の大人の方々と接する機会があります。電話やメールでのコミュニケーションの方法なども学ぶことができ、将来に向けて貴重な経験を積んでいます。

また、自宅と学校以外の第3の居場所ができるのも大きな魅力です。WeDで知り合った他校の友人や大人の方々には学校の悩みを相談しやすいです。皆の意見やアドバイスからいろいろな気づきを得られ、「学校での自分だけが自分ではないんだ」との視点をもつこともできました。

今後はどのような活動に力を入れていきたいですか？

WeDの活動をたくさんの人に知ってもらいたいと思っています。「からつまちなか文化祭」のチラシを市内の飲食店などに置かせてもらったり、SNSを使って活動内容を発信したりして、まずは唐津市でのWeDの知名度を高めたいです。

自分の高校の「校外活動発表会」とい

うイベントでもWeDを紹介し、そのことがきっかけで新たなメンバーが加わってくれました。高校生にとってボランティア活動は、参加するきっかけがなかなかないものです。だからこそ、きっかけづくりに積極的に取り組みたいです。

若者の活動を支えるために大人にできることは？

ボランティアは実際に取り組んでみることでその魅力を実感できるので、ボランティア活動に参加するきっかけづくりをしていただけたらと思います。例えばWeDでは「ボランティア証明書」を発行しています。ボランティア活動は推薦入試を受験する際の加点対象などになるため、最初はそうしたメリットを目的として活動に参加してもらってもよいのではないのでしょうか。

社協VCが若者とつながるには？

私たちは、高校生が参加するためのきっかけづくりとして、例えば大学入試に活用できる「ボランティア参加証明書」の発行だったり、ボランティア参加後の「温泉入浴」など高校生にとっての特典を準備するようにしています。それに加えて、高校生が楽しみながらボランティアに参加したいと思うきっかけを作っています。

はら ゆういちろう
NPO法人WeD 事務局長 原 雄一郎さん

助成金情報

(公財) 公益推進協会「^{しゃくかいしん}釋海心基金～統合失調症など精神疾患を有する患者の生活支援、自殺抑止支援活動、自死遺族のサポート活動等への助成～」(2024年4月12日締切)

安定しない社会情勢やストレスの多い職場環境などの影響で増加する統合失調症などの精神疾患を有する患者の生活支援活動、自殺抑止のための支援活動、家族を自死で亡くした遺族のサポート活動を行う団体への助成。(詳細は「公益推進協会 釋海心基金」で検索)

キーパーソンから学ぼう!



お互いにつながる
はじめての一步

人と人とのネットワークをつなげながら、人々の生活に直結するさまざまな困りごとにアプローチをしているキーパーソンを紹介します。

さまざまな分野のキーパーソンから協働のヒントを探り、読者の皆さまもはじめての一步を踏み出しましょう!

第12回

困りごとの解決を 第5のインフラにすることをめざす



東京都
株式会社御用聞き 代表取締役
ふるいち もりひさ
古市 盛久さん

東京都出身。20代で不動産仲介会社を起業。30代で生活支援サービス業に舵を切り、2010年に100円家事代行サービス会社「株式会社御用聞き」へ社名変更。大学生を担い手の中心とし、生活者の困りごとの解決を軸に活動する。社協との連携も多い。

「これだ」と、稲妻が落ちたような 感覚を受けました

20代で不動産仲介会社を起業し、それなりの利益をあげていましたが、預金通帳の残高が増えるたびになぜか心が疲れていくのを感じました。そして30代になり「自分の人生はこのままでいいのか」と自問するうちに「もっと世の中を良くする活動がしたい」と考えるようになったのです。そこで生活支援サービスに着手しましたが、1年間で1億数千万円の損失を出す大失敗に終わってしまいました。関わってくださった地域の方々にお詫びをして回り、皆さんの本音を聞くうちに、私は買い物弱者について正しく理解していなかったこと、生活上の困りごとは買い物以外にも数多くあることを学びました。それからさらに試行錯誤をしてたどり着いたのが100円家事代行サービスです。立ち上げ当初、ある高

齢女性宅で電球交換とインターホンの電池交換をしました。すると、インターホンが鳴らないことで来客に気づかず、社会と断絶されてしまうのではと不安を感じていた女性が「これで安心できる」と涙を流して喜んでくださいました。その時、私は「これこそ自分のやるべきことなのだ」と、全身に稲妻が落ちたような感覚を受けました。ささいな困りごとを解決することで人生が好転する人がいる。これをひとつでも多く社会に広げたいこうと、強く思ったのです。

大学生の成長につながるよう、 振り返りを徹底しています

現在、主な担い手として500人ほどの大学生が登録し、電球交換や郵便物の回収、買い物代行、草むしりや掃除の手伝いなど、利用者の困りごとの解決に取り組んでいます。大学生に成長しながら楽しく活動してもらうため、毎回、振り

返りの作業を徹底しています。大学生の目に映ったものに関心を持ち、「がんばったね」とか「そう見えたんだ。参考になった」などとコミュニケーションを取るのです。大学生の伴走者となり、彼らの体験をその場限りのもので終わらせないことが、成長に向けた社会教育だと考えています。また、利用者と担い手に上下関係はなく、同じ生活者であるとの意識も共有するようにしています。これは、豊かな互助の世界に欠かせない視点だと考えています。

ビジョンを大切にすることで 仲間が集まります

弊社は「会話で世の中を豊かにする」をビジョンに掲げています。お互いがあたたかい気持ちになる情景を、世の中にひとつでも多く増やしていくことをめざすという、弊社の活動のエッセンスを集約したワードです。このビジョンを掲げてから、担い手や連携先など仲間が集まりやすくなりました。ビジョンに共感してもらえるかどうかを、相手との相性を図る指標にできるからだと思います。ある時、大学生が誰に指示をされたわけでもないのに利用者にビジョンを一生懸命に話しており、利用者から「すてきなビジョンね」と言ってもらえた時はうれしくて泣きそうになりました。この活動を、電気・ガス・水道・通信に次ぐ第5のインフラにすることが目標です。



楽しい見守り（傾聴）。おしゃべりの時間を30分、週1回から提供している



100円家事代行・たすかるサービス。些細な手伝いや便利屋としての活動に取り組む

書籍紹介

『月刊福祉』2024年4月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

特集は「報酬改定から見通すこれからの社会保障」。4月の報酬改定を控えた今、社会保障制度の今後の方向性や報酬改定における重要なポイントを確認するとともに、今後より一層求められる支援と、法人・施設経営について考える。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

災害ソノトキ!

～災害時の連携に向けて、
平時から考えたい協働の視点～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携、協働が必要不可欠です。

本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

第12回 長野県 長野県社会福祉協議会

平時から連携するチームや
ネットワークが災害時の現場で活躍長野県社会福祉協議会
まちづくりボランティア
センター
主査
やまざき ひろゆき
山崎 博之さん長野県で発生した災害に対し、
県内社協によるチームで支援活動を展開

令和元年東日本台風（台風19号）の被害により、長野県では11の市町村で災害ボランティアセンター（以下、災害VC）が開設されました。長野県社会福祉協議会（以下、県社協）では、各市町村の被災地に職員を派遣し、県外ブロック派遣の応援をもらいながら、災害VCの開設や運営をサポートしました。この時、県社協の支援が手薄な地域に派遣したのが、県内の社協職員で構成する、災害初動時における先遣チーム「DSAT」です。県内の発災時に、被災地の災害VCへの組織的な支援を目的として、市町村を10ブロックに振り分け、2017年に設置したチームです。平時から研修会や訓練の実施、県外の災害支援への参画による人材育成を行うと同時に、災害時に相互応援を行う協定を締結し、継続的な人材派遣が可能となりました。また、被災者からの気軽な相談や住民による災害VC運営の協力を促すため、被災地域の身近な場所に多くのサテライトを設置しました。そこで県内の市町村社協に呼びかけ、幅広い職種の方が1日単位でスポット応援する仕組みを新たに構築しました。

被災した福祉施設にサテライトを設置。
地域住民も運営に参画したNPO等との現場での連携と「N-NET」を
通した課題解決プロジェクト

DSATの積極的な県外派遣を通して、全国の被災地で活躍する技術系NPOや県内の青年海外協力会など

多様な支援団体との連携が深まりました。千曲川の堤防が決壊した地域では、災害VCのサテライトと技術系NPOの本部が同一建物に同居し、技術を要する活動と一般ボランティア活動の連携を促進しました。

これらの協働をもとに、広域的な視点から課題解決のプロジェクトが生まれています。災害ごみの排出を促す「ONENAGANOプロジェクト」や「農ボラ（信州農業再生再興ボランティアプロジェクト）」などが企画され、現場での行政、社協、NPOの連携を促進しました。

これらの企画創出のプラットフォームとなったのが、「長野県災害時支援ネットワーク（通称：N-NET）」です。2017年に行政や社協、NPOや団体などで結成。赤い羽根共同募金の助成を受けて、平時から課題の共有や「顔の見える関係づくり」に取り組んできました。台風19号災害では県庁に1室を提供され、応援NPO等の調整窓口を担いました。県庁にN-NETの仲間が陣取り、「鳥の目」の視点による現場への応援は災害VCの力となると同時に、農ボラへのJA長野の参画をはじめとして、多様な支援活動の展開につながりました。

災害時に企業と迅速に協働できるよう
パートナーシップを構築

この災害の混乱期に感じたこととして、企業とのつながりの重要性が挙げられます。資機材や人材、場所の確保など、企業だからこそできることがあるため、平時から顔の見える関係性を築いていれば、より迅速で効果的な支援活動を行うことができたはず。そんな経験から、2023年に損害保険ジャパンとともに「災害ボランティアセンター応援企業パートナーズ サスながの」を設立しました。災害時に県社協と地元企業が速やかに協働できるよう、平時からの連携を強化していきたいです。

インフォメーション

月刊『ボランティア情報』定期有料購読のご案内

(全国社会福祉協議会 全国ボランティア・市民活動振興センター)

いつも月刊『ボランティア情報』をご愛読いただき、誠にありがとうございます。新年度を機に、月刊『ボランティア情報』の定期有料購読を始めてみませんか？

【申込方法】

地域福祉・ボランティア情報のホームページから、『ボランティア情報』定期有料購読申込書をダウンロードいただき、Eメール(vc000000@shakyo.or.jp)もしくはFAXにてお送りください。

月刊ボランティア情報 購読 で検索

https://www.zcwvc.net/member/mag_volunteer/